

『ロシアにおける反ユダヤポグロム史のための資料集』(2)

黒川知文

社会科教育講座

The Materials for the History of Anti-Jewish Pogroms in Russia (2)

Tomobumi KUROKAWA

Department of Social Studies (History), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

10年後、つまり、ポグロムの前夜、ユダヤ人の表面的・法的な生活条件には少しの変化も見られなかったにもかかわらず、彼らの経済的影響は弱まるどころか、かえって、急速に拡大の一途を遂げていた。

1881年、ヴォルイニア県にあった123の軽工場のうち、118はユダヤ人の所有であった。559ある酒類販売店のうち496がユダヤ系であった²⁶。ポドリスク県では、119あるぶどう酒醸造所のうち103、25あるビール醸造所のうち18がユダヤ系であった。煙草工場はすべてがユダヤ系であった。57ある羅紗工場のうち大部分がユダヤ人の所有であり、残りの工場もユダヤ資本によって運営されていた。147ある製粉所の約90パーセントがユダヤ人の所有であった。合計24万108デシャーチンあった424の領地がユダヤ人によって利用されていた。1879年から1881年まで、この県における、国の請負業務と納入は全部で129あったが、そのうち119がユダヤ系業者によって占められた²⁷。チェルニゴフ県では、1881年、ユダヤ人が借りていた土地の面積は、14万365デシャーチンであり、ユダヤ人が(ほとんど貴族から)購入した土地の面積は、7万9881デシャーチンであった。パンと煙草の販売はすべてユダヤ人の手に握られていた。外国に輸出されたパンのうち、239万8987プードがユダヤ系業者により、キリスト教徒が扱ったのは18万9219プードであった。木材の取引において、ユダヤ系は他者を圧倒していた。1401あるギルド商社のうち681がユダヤ系であった。4368あった小企業のうち2359が、63ある郵便局のうち48がユダヤ系であった²⁸。キエフ県では、1880年に、第1ギルドのユダヤ商人が119であったのに対してキリスト教徒は25、第2ギルドでは、キリスト教徒は576、ユダヤ人は130であった。地主領地の管理人は、ユダヤ人2431人に対してキリスト教徒1120であった²⁹。

南西部地方に見られるような状態は、西部地方においても顕著であった。ヴォルイニア、コヴノ、グロドノ、ミンスク、ヴィテブスクなどの県は、ユダヤ人が最も活発に経済活動を行った地域である。ヴィレンスク県では、その地方の農産物や輸出入商品を扱うすべ

ての卸売業は、主にユダヤ人の手に握られていた。1881年の県におけるギルド商人の数は、ユダヤ人が254人、キリスト教徒67人であった。ユダヤ人が利用する賃貸借の土地は、12万デシャーチン以上であった³⁰。ミンスク県では、1878年、1879年、1880年に、発行された売買証書の数にはユダヤ人に対して1万3019通であるのに対して、キリスト教徒へは2,332通であった。町の手工業への証明書は、ユダヤ人に対して8772通であるのに対して、キリスト教徒へは3785通が発行された。国家機関の請負業務と納入業務については、ユダヤ人が246件、キリスト教徒が20件であった³¹。

南部のすべての都市や村への移住や短期間の滞在すら禁じられたため、南部の県には、西や南西の県と比べて、ユダヤ人の数が著しく少なかった。しかし、これらの南部の県においてすら、徐々に流入してきたユダヤ人たちによって、地方の経済活動に活気もたらされた。彼らは、人々の前に一連の経済的な課題を提示し、自らそれらを解決した。地元民はユダヤ人の解決に興味を示した。徐々に、しかし、けっして中断することなく、この地のユダヤ人は、自分の手を使って土地を直接耕すという意味において、農業に慣れていった(エカチェリノスラフ、ヘルソンなどの県のユダヤ人入植地)。また、彼らは、土地の内部や表面の商業的工業的利用に習熟していった結果、幾つかの地主の領地がユダヤ人の手に渡った。

すなわち、一部は自分の所有として、主には、長期の賃借地として彼らは土地を手にした³²。南地方の経済にとって、また政治にとっても最も重要な幹線(例えば、ハリコフーセヴァストポリ、ハリコフーキエフ、キエフーポルタヴァなど)を含むすべての鉄道路線が、利権企業家であり請負業者であるユダヤ人によって建設された³³。特権的なユダヤ人にしか門戸を開かなかったハリコフ県においてすら、工業や建設の分野では、多少ともきちんとした仕事のできる企業や、さらに国有企業ですらも、ユダヤ人側からの様々な協力なしで仕事を進めることのできる会社は一つもなかった。例えば、1880年に、この県の防衛庁関係の(大砲、

工学、経理などの分野）ほとんどすべての請負業務や納入は、契約をもっとも正確かつ良心的に遂行する業者ということでユダヤ人に任された³⁴。

もちろん、前に引用された全データが、これらの県に住むすべてのユダヤ民衆の様子を描いているわけではない。これらユダヤ民衆の90パーセントが、西部地方と南西部地方の都市や大村落の密集した住居に住み、貧困と病気の中で、抑圧された悲惨な生活を送っていたのである。何百もの禁止命令から成る警戒線が、彼らの周りに張り巡らされており、それを越えて東や南へ抜け出そうと少しでも試みる者には厳しい報復が待ち受けていた。他方、ユダヤ企業家の資本は、生き返った巨大な国の需要と比較すれば、実質的に無に等しかった。それゆえ、もし当局によって自分たちに対して押しつけられた常軌を逸した条件の下においてですら働きたいとするユダヤ人の抑えがたいエネルギーと願いをもってしてもこの国の資本不足は解消されることがないとしたら、ユダヤ資本が考慮に入れられることはあり得なかったのである。実際、ロシアの経済発展を推し進めたのは、豊かで強大な外国資本であった。それは、ロシア全体を覆い尽くしたのである。だが、この資本を引き込む、言わば、パイプ役になったのも、ユダヤ人なのである。彼らは、——どこに追いやられようとも——農奴制ロシアという暗く立ち後れた辺境の地において、資本が定着するのを助ける仲介役となり、新しい生活形態の直接の創造者になった。現地の人々の保守性という不利な状況の中で、似たような仕事が成果を収めるためには、いかなる障害があってもたじろがない抑えがたい力と、あらゆる複雑な問題——これは、時に大きな危険をもたらすこともあるが、一つの経済的形態が崩壊し、その廃墟の上に新しい形態が速やかに築き上げられるような時には、明らかに、十分に許容可能なものともなる——に対処できる財政に関する豊かな知恵を合わせ持つ必要があった。

この、ロシアにおける資本の第一の蓄積の時期は、「会社濫造」及び「ロシアにとって高くついた経済政策上の他の実験」と深い関わりがあると十分な根拠をもとに考えられている。この会社濫造にユダヤ人も関わっていることは疑いようもない。しかし、ユダヤ資本が、それ自体では弱く臆病であり、危険の伴う企画には及び腰であったために、彼らの投機的企業への参加はロシアに対して特別目立った害を与えるはずなかった。いずれにせよ、「彼らの活動の肯定的な面は、彼らが会社濫造に参加したことによって与えた可能性のある損害をはるかに上回っていた」ということは、確かに立証された事実と考えなければならないのである。

このようにして、地主や平民の知識人たちは、自分たちと同じくらい熱意を持ち、ロシアの経済的再生の

ために献身しようと身構えているユダヤ人が、自分の隣りで、同じ仕事に携わっているのを見たのである。しかし、このような協力関係は、彼らの気に入るものではまったくなかった。彼らが恐れていたのはユダヤ人の資本ではなかった。ユダヤ人は、資本の力によって、彼らが経済活動に参加するのを妨害することができたが。純粋なロシア資本にとって大きな脅威だったのは、次から次へと様々な領域を侵食していた外国資本であった。それは、貿易だけではなく、工業の分野をも蚕食していたのである。彼らにとって不快だったのは、個々のユダヤ系資本が示した投機的なやり方でもなかった。

この点において、彼らの固有の罪は、はるかに顕著であり、ロシアにとって有害だったが。ロシア出身のブルジョアが驚いたのは、分野を問わずユダヤ人が示した労働に対する精力と渴望であった。ブルジョアたちは、「もし、ユダヤ人たちを押さえつける何らかの手段を講じなければ、自分たちが手をこまねき、新しい環境になかなか適応できないでいる間に、彼らは、知恵によって柔軟に状況に対応し、驚くべき速さで新しい環境に適応していき、ついには自分たちを追い越して真っ先に『日の当たる有利な場所』を獲得してしまうに違いない」と思わざるを得なかった。地主も、庶民知識人も、自分たちはユダヤ人と公正かつ正当な競争をする用意はできていないと感じていた。彼らは、精神的で活動的なユダヤ人を前にして冷静さを失い、その持てる能力をまったく発揮できなかった。これは彼らにとって大きな脅威となった。「ユダヤ人が歩いている」——これは、彼らが最も恐れていたことであった。「ユダヤ人が歩いている」ならば、ユダヤ人は、こちらにやってきて、全部をさらって行き、ロシアのブルジョアの手には何も残らない、ということになるからだ。だから、彼らは、最後の手段を取らざるを得なかった。つまり、ユダヤ人の足を止めることである。彼らが「来る」のを妨害し、路上に縛り付けておくことによって、彼らがそれ以上進むことを望まなくなるようにすることである。

1870年代末にロシアの地主や平民の知識人の社会が抱いていたこの恐れは、政府にも伝わっていった。まだ1860年代末頃に、ユダヤ人が人目につかぬ方法で西部地方の農業に介入していることが明らかになり、政府の援助を背景に地元のポーランド人を抑圧するためにそこに侵入したばかりのロシアの地主たちがユダヤ人の勢力に対して警戒を発するようになると、政府は、元老院代表に、地主たちに対して、「ユダヤ人と共働することによって、利益が得られる」と親身に説明し、西部地方におけるユダヤ経済人への完全な圧迫の傾向に対してはっきりと反対の立場を取った。1868年1月29日の元老院布告の中に、以下の考えがはっきりと見て取れるのである。すなわち、「西部地方にお

いて、工業及び商業の仕事のほとんどすべてがユダヤ人の手に握られており、彼らの仲介なしでは製粉所や工場を操業する能力のある人物を捜すことはほとんど不可能であった。その経営には、何らかの技術的な知識と熟練が必要であるため、もしユダヤ人に、そのような賃貸地の保持を禁止するならば、ロシア人が代わってその土地を保有しても、まったく厄介な状態に置かれるだけだし、製粉所や工場がいくつか消えてしまうこともあるかもしれない。このことは、西部地方における工業や経済一般だけではなく、ロシア人地主の定着にとって悪影響を与えることだろう」と。もちろん、元老院が、西部地方のユダヤ人に対してそのような態度を取ったのは、人道主義や公平さからではなく、もっぱら、非常に明瞭な国家の利益からであった。この場合、元老院は、賃貸問題（つまり、「賃貸地」）以上のことには踏み込まなかった。

しかし、10年後にはすでに、そのような控え目な政策ですら、政府にとって危険視されるようになっていた。この10年間に、顕著な「愛国主義的な」報道機関が生まれ、一方では純ロシア産の商業工業階級を、他方では農民たちを、ユダヤ資本の「圧迫」と「搾取」から保護した。しかし、実際は、この地方の農民は最も影響力が小さいため、報道機関は彼らを守ることをせず、このことについて大声で叫び立てることはしなかったのである。この「愛国主義的」報道機関による反ユダヤ宣伝において、農民は、ユダヤ人による搾取を大声で非難するための、単なる隠れ蓑、口実に過ぎなかった。実際には、ロシアの金融界から金をもらっていた報道機関は、ロシアの商工業者たちをユダヤ人との競争から解放することを自らの使命としていたのである。報道機関の者たちは、この競争は、まだ確立されていないロシアの商工業階級にとって非常に危険であると考えていた。しかし、このことをはっきり言うのは、都合が悪かった。というのも、純ロシア産のブルジョアたちに、有能な競争相手の「陰謀」から守ってもらう必要がある無能なドラ息子（ドラス）の役割を演じさせることになってしまうからである。その後、ユダヤ人の搾取の対象として農民と小規模手工業者が登場した。彼らに対して、政府や世論は懸命に意識を集中するようになった。彼らは、無知で、虐げられている状況の中にあっただけで、特に騙されやすく、怒りっぽく、それゆえに、特別な保護が必要な存在であると見なされた。目的は達成された。すなわち、かつて国家にとって有益な市民と見られていたユダヤ人は、今や、国家のお荷物と見なされるようになった。彼らは、社会の安全を守るという名目ですぐに退治すべき猛毒な蜘蛛になったのである。こうして、もはや、強力で有能な競争相手がなくなった現在、ロシアの商工業階級の人々は、自由に活動できるようになり、法律にしたがって、思うがままに、かつてユダヤ人が占めていた地位

と立場につくことができたのである。

ロシアの民族主義報道機関の意図は、このようなところにあった。すなわち、すでに見たように、支配階級の利益の保護の名のもとに、国家の真の利益を損なうことである。憎悪と軽蔑という名の毒は、ユダヤ人に対する唯一の武器として、大きなうねりとなって、ロシア全土を覆った。それは、ロシア人民の名誉と良心を損ないながら、もはや自分自身ですら想像もできない程大規模な事件に発展した出来事に道を備えたのである。ユダヤ人の未来に脅威を感じていた官僚やロシアのブルジョアたちが支持していた『ロシア人』、『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』、『ミヌータ』、『ヴィレンスキー・ヴェスニク』、『キエヴリャーリン』、『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』、『ノヴォロシースキー・テレグラフ』、『セーリスカヤ・ベセーダ』（そして、『ゴラス』までも）のような新聞社は、ロシアのほぼ全土において、また、主にいわゆる「ユダヤ人定住地域」において、誰にも妨げられずに、また、人間に対する憎悪を露にした口調で、ユダヤ人に対する苛立ちと不満をかき立てた。この「口論」を「理論」——特に、ユダヤ民族とキリスト教文明との間の不調和に関する理論——にまで昇華しようと、まだ1860年代に（モスクワの新聞『ジェーニ』に）アクサーコフによって行われた数々の試みは、単なる口実であり、実質的に、その背後にあったある階級の明確な意図を隠す隠れ蓑に過ぎなかったのである。彼らは、農奴制の眠りから醒め、資本主義社会に歩を進めつつあったこの時期に、ロシアが与えてくれるはずの恩恵の一片たりとも取り逃したくなかったのである。そのアクサーコフは、後に、これらの理論的な「高み」を残したことが、無駄にはならなかった。そして、彼は、この立場がどっちつかずのあいまいなものであるということをすべてはっきりと理解した上で、ユダヤ人に関して考察しつつ、すでに提起した生物学的な民族主義の命題——この命題は「ユダヤ人の解放について論じてはならず、ロシア人のユダヤ人からの解放を論じなければならない」という言葉にまとめることができる——から、純粹に経済の領域に移行した。しかし、アクサーコフやドストエフスキーなど、偉大な作家や時事評論家たちが理論化したものは、密告の形式か、もしくは、ユダヤ人からの「強制的な解放」への公然たる呼びかけの形を取ったので、大報道機関の時事評論家たちには、ごく簡単に取り上げられ、おざなりに論じられただけであった。

この勢力による圧迫の下、ユダヤ資本とロシア資本との戦いの前で、政府は速やか、かつ平和裡に、ユダヤ人の利益や必要の視点を拒否した。ロシア市民の利益や必要については同情するが、ユダヤ人の場合は別であった。

この視点は、1868年1月29日の元老院法令の中で具

体化され、政府のすべての機関によってユダヤ人の経済的抑圧のために利用された。ここで、ユダヤ人によって搾取されていると言われる農民の利益を守ろうという意図が前面に現れたが、ここにおいても、この音は、地主寄りの報道機関の嘆きの調べであっただけではなく、調子が外れてもいたのである。政府の側からはっきりそれと分かる陽動作戦が採られた。すなわち、政府は、農民——実際のところはユダヤ人からいかなる脅威をも受けていなかった——について語るのだが、その実際の意図は、ユダヤ人たちを厳しく扱い、脅したり、その仕事を中断させることによって、まだしばらくの間は力の弱いロシアブルジョアの幼芽を、商工業分野におけるユダヤ人との競争から守ることにあったのである。本当の問題は農民にあるのではなく、また、ユダヤ人が最下層の人々を搾取しているという話も、もっぱら、ロシアの買い付人や工業者との競争に果敢に乗り出して成功を収めていたユダヤ人に対する未来の圧迫だけではなく、現在の圧迫をも正当化するための創作であった。ユダヤ人の成功は、次の公平なデータから明らかである。すなわち、1858年から1878年までの20年間に、ユダヤ人が居住する15の県における農民人口は、31.5パーセントの増加を見せたのに対して、ロシア人しか居住しない隣接の11県においては、20パーセントしか増加しなかった。このことは、もちろん、ユダヤ人による搾取がまったく無かったということを明らかにしているのである³⁵。A・マリンスキーの研究『人口データによる国民の豊かさ』のために派遣された有名な経済学者ブリオーフと、その後には派遣された経済学者スポーチンは、次の事実を明らかにした。すなわち、70年代の終わりに、ユダヤ人定住地域の15県において、「とびきり豊かな」（マリンスキーの表現）農民の数は9.5パーセントに達していたのに対して、ロシア人だけが住む隣接県においては0パーセントであった。また、「非常に豊かな」農民の数は、ユダヤ人が居住する県において23.9パーセントであるのに対して、隣接11県ではたったの0.5パーセント、「豊かな」農民の数は、ユダヤ人の県では48.1パーセントであるのに対して、隣接11県では13.8パーセント。「平均的な」農民の数は、ユダヤ人県で18.5パーセントに対して、11県では66.2パーセント。そして、「不満足な」農民の数は、ユダヤ人県では0パーセントであるのに対して、隣接11県では19.4パーセントであった³⁶。

このように、ユダヤ人が地元の農民たちを搾取したなどとは、口に出すことすらできないのである。

しかし、搾取の他にも、例の報道機関の者たちと彼らに追従する政府は、「ユダヤ人は、自分が経営する居酒屋で農民たちを酒飲みにして、墮落させ、ロシア民族の身体的健康に脅威を与えている」と叫んだ。これらの叫びがどの程度真実を反映しているかは、1877

年、1878年、1879年の、各県とロシア人における酒類の消費税とその需要を公平に比較した表（この表は、我々にとって、現在きわめて重要な資料である）を見れば一目瞭然である。この表から分かることは、モスクワ県において一年間に各個人が買い求めた葡萄酒の平均金額は5ルーブル15コペイカ、ペテルブルグ県では5ルーブル73コペイカ、トゥリスク県2ルーブル46コペイカ、オルロフ県2ルーブル45コペイカ、……であるのに対して、ボグロムが発生した県では、タヴリーダ県2ルーブル72コペイカ、ヘルソン県2ルーブル93コペイカ、ベッサラビア県2ルーブル48コペイカ、ハリコフ県2ルーブル23コペイカ、エカテリノスラフ県3ルーブル16コペイカ、キエフ県3ルーブル12コペイカ、ヴォルィニヤ県2ルーブル42コペイカであった³⁷。

このように、ユダヤ人がほとんど居住していなかったペトログラードやモスクワ県の住民ひとりが一年間に平均して買い求めたアルコール飲料の量は、ユダヤ人居住地を含む県の住民よりも2倍多かったのである。また、たとえトゥール県やオルロフ県などの住民の年間酒類消費量が、ユダヤ人居住地のある県の住民のそれとほぼ等しいか、または、それよりも少なかったとしても、南部の県は北部や中央部の県よりも常に裕福であり、それゆえ、この地域における消費量が、北部や中央部の県ほど、農民や町人の家計にとって重荷となることはなかった、という重要な事情も見落としてはならないのである。しかし、結局、人民による酒類の消費が彼らを破滅に導き、実際、ロシア民族の人種的完全性への脅威となったのは、ユダヤ人が居住していた県においてではなく、むしろ、ユダヤ人がまったくいないか、いたとしても取るに足りない程でしかない北部や中央部の県においてであったという事実は重要である。さて、I・ヤンジュールは、「アルコール中毒による死亡は、常に、南部の県よりも、むしろ、中央部の大ロシア地方の県や北東の県において、はるかに多く見られる」ことを、普遍的な法則として明らかにした³⁸。とくに、ヴァート県では、1886年に、飲酒による死者が10万人につき12.3人であり、これは、非常に多くのユダヤ人が住んでおり、その地方の酒類販売業のほとんどすべてを掌中に収めていたベッサラビア県などで、飲酒による死者が、10万人につき0.8人であることと対照的である³⁹。

このように、農民を搾取したとか、人々をウォッカ漬けにしたことが真の問題ではなく、また、来るべき火災と流血の原因でもない。真の原因は、ユダヤ人とロシア人の二大資本組織とその利益が衝突したことにある。一方は、自らの力を、ロシア経済の確立という現実的な仕事に注ぎたいというエネルギーと熱意によって武装し、他方は、盲目的な愛国心と大きな報道機関、強力な政府機関によって武装した。どちらの側が勝利するかは疑うべくもなかったが、勝敗を決する

最高裁判官として呼び出されたのは、暗愚で、飢えた、怒りに満ちた民衆であった。そして、彼らは、審判を下したのである……。

1881年の初め頃の状況はこのようなものであった。第一に、飢えと無知と無為の農民たちが、牢屋やシベリヤの強制労働を夢見ていた。彼らは、これを天国の住居と見なし、そこに行けば、食べ物にも困らず、住むべき場所もあると考えていたのである。彼らは、最初の呼びかけがあれば、喜んで奪い、焼き、切ろうとしていた。自分たちの耐えきれない悲しみを、血やタダ酒（どちらでも大差はなかった）で紛らすことができるからだ。

第二に、無能で盲目の政府が、自分たちが犯したこれらの民衆に対する罪に目を向けず、その恐ろしいばかりの土地不足と貧困から目を背けていた。彼らは、北部から南部に向かって、仕事とパンを求めて移動する民衆の流れをくい止めたり、または、それをどうにかして秩序立てる能力を欠いていた。それどころか、政府は、自分の権威をかさに着て、この集団から見て傲慢に見える振る舞いをした。彼らは、政府に向かってあえて手を挙げるようなことはせず（そして、政府はこのことをよく知っていた）、かえって、政府やその代理人たちのすべての命令を愚痴一つこぼさず行い始めた。

さらに、第三に、その当時ロシアの歴史の舞台に新しい勢力——ロシア人ブルジョア——が登場した。彼らは、自分の立場を理解し始め、歴史が彼らに用意していた役割を気に入り始めていたのだ。ロシアのあらゆる経済的資源と運命を一手に握り操作するという貪欲な願いを胸に抱きながら。もちろん、すでにロシアの土地に入り込んでいた外国資本があったからこそこの話なのだが。彼らは、報道機関という、最も恐ろしく、最も正確に敵を捉え打つ剣によって武装していた。ブルジョアたちは、報道機関を自分の一存で操作し、自分がこれと選んだ標的に対して致命的な打撃を加えさせることができた。政府がブルジョアを必要としていたのと同じくらい、ブルジョアも政府を必要としていた。そして、これだけ激しい、敵意むきだしの権力者たち（彼らはそれぞれの分野で敵対した）に囲まれ、肉体的に無力で、自分の精力以外何も武器を持たず、権利をはぎ取られて仲間外れにされたユダヤ人は、気がつく自分、チャンダーラのように感じるのである。チャンダーラは、自分の天賦の才能と愛情という最善の贈り物によってロシアという自分のフキタンボポに近づいたが、そこまでしても、ようやく受け入れられたに過ぎなかったのである。

この権力者たちの間で絡み合った全般的な利益の中で、ユダヤ人の利益だけが目に留められず、尊重されなかった。ユダヤ人が役立てたのは、利益を得ることだったのに。これは、内部の利益が対立した場

合に犠牲になる。ロシア人が最後に自分の権利と敵の両方を理解する時まで報復の犠牲となるのである。そして、この犠牲となったのはユダヤ人であった……。

歴史のネメシス〔復讐の女神〕を味方につけたグリニエヴィーツキーの学生の手は、皇帝の両足に向かって爆弾を投げつけた。この爆弾は、人民の苦しみと涙、怒り、そして、満たされることのない願いの結果であった。爆発の轟音の中で、血塗られた王によって汚された玉座そのものが揺らぎ始めたのである。爆発後、ロシア全土を覆っていた不気味な静けさの中で、暗闇の力が成長し始めた。誰もが「これはただ事ではすまないだろう」と考えていた。「誰かがどこかで復讐の機会を狙っているに違いない。皇帝の仇討ちのために誰かの血が流されるだろう」と。しかし、一体誰の血だろう？ この答えも程なく明らかになった。それは、ロシア全土の、貧しく、権利を奪われた人々の血、ユダヤ人の血である。飢えた怒れる群衆の目はすでに長い間、ユダヤ人の上に注がれていた。彼らは、20年もの間、いや、それ以上もの間、自分の飢えと隷従と欲求不満から来る怒りのはけ口を探し求めていたのである。無知な民衆は、自分の兄弟であるユダヤ人の迫害者にならざるを得なかった。ユダヤ人に何か罪があったわけではない。もしあったとしても、「彼らも、ロシア人と同じように奴隷状態に置かれていた」ということだけである。

しかし、このような状況だけでは、ロシアの民衆はユダヤ人に対して手を挙げるができなかったであろう。もし彼らがこの点に関して明確な指示を受けていなければ。また、自分の犯した罪に対して完全な免罪符を手に出れるという確信がなければ。彼らにこのような指示を与えたのは、報道機関であった。また、ユダヤ人を襲っても罪にならないという確信を得たのは、3月1日の事件の責任はユダヤ人にあると暗示し、ボグロムを公然と呼びかける新聞がロシア国中に自由に出回っており、それには権力のお墨付きまでついていたという事実があったからである。『ヴィレンスキー・ヴェスニク』は、3月2日にすでに、ユダヤ人を事件の犯人扱いし、「これは奴等の仕業だ！」と明確に述べた。『ノーヴォエ・ヴレーミヤ』は、死亡した第2の犯人は「東洋風の顔立ちをしており、鉤鼻であった」——つまり、ユダヤ人であった——と述べ、彼らに制裁を加えよ、と大衆に訴えた。『ノヴォロシースキー・テレグラフ』（3月20日）は、過越祭にオデッサにおいてユダヤ人狩りが始まる、という噂について突然報じ始めた。というのも、「3月1日の事件後、民衆は悲嘆と怒りの中にあり、その怒りを誰かに向けて爆発させる恐れがある」からであった。もしユダヤ人でないなら、一体誰に怒りをぶつけたらよいのか。ユダヤ人は、「経済的な圧迫への」報復を受けなければならないのだ、と。

『キエヴリャーリン』は、3月1日の歴史的事件を取り上げて、一連の記事(61, 65, 75, 77号・1881年4月5日付け最新号)の中で、できるだけ分かりやすい表現で、ロシア人に対して、「ユダヤ人はロシア人にとって経済的に有害な存在であり、彼らを完全に成敗するまで戦い抜く聖なる必要がある」と熱心に説明した。エリサヴェトグラードは、恐ろしいボグロムの波が発生した場所である。地元の新聞は、ユダヤ人狩りを行う政治的、経済的理由は一切なかったが、ユダヤの過越祭の直前に、キリスト教徒たちの間に、ユダヤ人がその儀式の中で殺人を行っているという恐ろしい噂を流し、ボグロムの発生に道備えをしたのである。

ユダヤ人しか居住しておらず、飢えた無為の群衆が当てもなくさまようヨーロッパロシアのほとんど全域において、報道機関は、一部の、特に憤りに燃え、飢えに苦しんでいた人々を挑発して、他の弱く無防備な人々に攻撃を仕掛けさせるという恐ろしい仕事を行ったのである。そして、その攻撃には、ユダヤ民族の経済力を殲滅し、ロシア資本に平らな道を用意するという大義名分が与えられた。「これよりも力強く、また、同時に無力な言葉は見付からなかった」と、ある時ツルゲーネフが語った。たしかに、ロシアに住むユダヤ人の目の前で起こった前代未聞の惨事の前夜に言われたこの言葉ほど、憎悪を強烈にかき立てる言葉はこれまでなかったし、まさに印刷されたそのような言葉は皆無だった。

ボグロムは3年以上続いた(1881年から1884年夏まで)。すでに見たように、ボグロムの根底には、(1)明確な経済競争、(2)農民に関する未解決の大問題があった。ロシアの経済的運命と政治的運命が複雑に結び合っている点は、とにかく、1881年3月1日以後、断ち切られなければならなかった。ロシアの解放という名の道は、歴史において前もって敷設されていたのである。しかし、新しい時代の到来前夜において、この道がどのようなものであるかについて誰も知っているわけではなかった。少なくとも、盲目で、体制に抑圧されていた人民にとって、それは謎のままだった。

ロシアの民族的意識の歴史における転換点は、あまりにも厳しく、悲劇的であり、期せずして犠牲者と流血を招かざるをえなかった。犠牲となったのは、ユダヤ人であった。ユダヤ人は、自らの血と財産を犠牲にして、ロシアの解放に至る道程の第一段階を占めるに至った。この経緯については、目の資料を参照されたい。

クラスヌイ・アドモニ伯爵

原 注

- 26:『参考資料』, 第11部, 96ページ。
 27: 同, 第10部, 59ページ, 第11部109及び258-59ページ。
 28: 同, 第10部, 67ページ。第11部, 158ページ。
 29: 同, 第11部, 76ページ
 30: 同, 第10部, 81ページ。第11部, 159ページ。
 31: 同, 第11部, 220ページ。
 32: 同, 第10部, (『土地所有と借地』) 3ページ。
 33: 同, 第11部, 248ページ。
 34: 同, 同上。
 35: A・P・スボーチン, 『ユダヤ人問題の解明』, 『ユダヤ図書館』, 第10巻, 72ページ。
 36: I・S・ブリオーフ, 『西部, 大ロシア, ポーランド人の各県における物質的及び精神的豊かさ』第3巻, 参照: スボーチン, 前掲書。
 37: バロン・E・F・ノリジェ, 『酒類販売業と消費税制』, 第2章, 64ページ以降。1879年のノリジェのデータによれば, アルコールの消費量において, ロシアは, 他国の中で第9位でしかない(1100ページ以降)ということを描き出しても無益ではないだろう。
 38: I・ヤンジュール, 『社会病理としての飲酒』。著書『よりよい未来を目指して』(329-330ページ)に収録。次も参照せよ。『国民の飲酒について』, 『セーヴェルヌイ・ヴェーストニク』誌, 1893年, 第12号, 87ページ。
 39: 参照: B・F・ブラント, 『外国及びロシアにおける飲酒対策』, 1897年, 18-19ページ。

分 析

1881年ボグロムを調査したクラスヌイ・アドモニによる「はじめに」の後半である。以下のことが確認できる。

第一に、ボグロム直前のロシアにおいて、ユダヤ人の経済的影響は急速に拡大していた。だが、ユダヤ人の90パーセントは、都市や村落において下層民、貧民として居住していた。

第二に、ロシア資本にとって脅威であったのは、国内のユダヤ資本ではなくて、外国資本による侵食状況であった。同時に、ユダヤ人の労働に対する「精力と渴望」にもロシア人は脅威を感じていた。

第三に、民族主義的な報道機関の多数が、ユダヤ人に対する「憎悪と軽蔑」を報道し、ロシア民衆に影響を与えていた。

第四に、クラスヌイ・アドモニは結論として以下の3点を挙げている。すなわち、①農民は飢えと無知の状況にあった；②政府は土地問題屋貧困状況を解決しようとしなかった；③ロシア人ブルジョワが報道機関により「武装」してユダヤ人を敵対視していた。

このようなロシア資本と外国資本との経済競争と、農民に関する問題が未解決であったことが、ボグロムの根底にあったと論じられている。

(2009年9月17日受理)